

がんばれ!!

ばいとくん

第60回 サッカー場での熱狂

今回のばいとくんはサッカー場へと向かう。中学生の選手がピッチの上でどれだけ動き回っているかを調べるのだ。聞くところによると、調べたデータはサッカー協会の研究に使われるらしい。

データ採取の対象となるのはJリーグのユースチームと田舎のサッカークラブの対戦。「このピッチの図の上に選手の軌跡を書き込んでいくんだ。君は田舎のチームの10番を担当してくれ」「10番かあ、キーパーなら楽なんだろうけどなあ

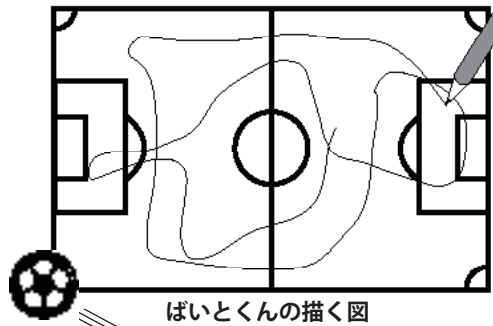
「ピィ——ッ!」

笛がキックオフを告げる。早速、ばいとくんの担当する10番はダッシュして

前線へ。その動きを書き込んでいるうちに、田舎チームはボールを取られ、10番は急いで戻る。ばいとくんも忙しくペンを動かす。

何とか10番の動きに食らいついていたばいとくんだが、やつは曲者である。華麗なフェイントは敵のディフェンスだけでなくばいとくんまでも欺き、コーナーキックのときはどこからともなくふっと出現する。そのたびにうまくたどれず、無理やり前後の動きから推測してごまかす。やばい。

忙しい仕事に悪戦苦闘していたばいとくんだが、時間が経つにつれて慣れてきた。しかし、残り時間はわずか10分。田舎チームはいつの間にか大差をつけられていた。何気なくユニフォームを見ると、Jリーグのユースチームの方にはスポンサーのロゴが入っている。「やっぱり金があるところが勝つのかなあ」ばいとくんはつぶやく。知らないうちに田舎チームに肩入れしていた。



ばいとくんの描く図

そして、試合はロスタイムへ。ここで10番が意地を見せた! フェイントを巧みに使った素早いドリブルで敵を翻弄し、一気にゴール前へ。シュート!

ゴ————ル!

「やったあ!」思わず叫んでしまった。そうしたら、「試合を見に来たわけじゃないんだぞ」と担当者に怒られた。

慣れないことで仕事は難しく、給料も安かった。だが、サッカーが大好きなばいとくんは、胸の高鳴りが止まらなかった。ひとつのことにこれほど熱狂することなんて最近なかった。10番に感謝!

(おーたち)

SHOP INTRODUCTION 105

東一条の らーめん屋台



取材を行ったのは日が変わる頃だっただろうか? 明かりのない正門前に浮かぶ赤提灯には、深夜に活動する僕たちを惹きつける不思議な魅力が漂っている。

「営業時間は昼休みの1時間と午後7時から午前1時ごろまで。でも、終業時間は季節によってまちまちだし、雨や雪の日は休みにするんだ」

ご主人がこの場所で営業を始めたのは今年の2月から。屋台自体は5年前に始めたそうだ。

正門前に店を出す前は、山科でスナックやバー帰りのサラリーマンを相手に商売をしていたという。しかし、屋台は飲

酒運転のお客が集まるということで、警察にマークされてしまった。

「去年の6月から飲酒運転の罰則が厳しくなって、山科では商売をしなくなりました。お客が捕まるのは辛いからね。やめようかと思った時、知り合いから『学生街で屋台を出してみたらどうだ?』と勧められて。それでやってみようと思ったんだ」

学生向けの商売ということで、メニューを大幅に変更したそうだ。現在のメニューは300円の「並」と500円の「大」のみ。

「山科で店を出している時、若い人に『とにかく安いものを』と言われて作っ

たメニューをここでも出している。ただ、300円とはいえ味に手抜きはできない。今の人は舌が肥えてるからね。このラーメンも仕込みに6時間はかけているんだ。味には自信があるよ」

終始恥ずかしげに語るご主人だったが、ラーメンへのこだわりに関しては力強く答えてくれたのが印象的だった。

「若い人と話は合わないけど、聞いてると面白い。この商売を続ける楽しみの一つだね」そう語るご主人の屋台には眠らない京大生たちが今夜も集まってくる。取材を終えた僕もその一人になって「大」を注文した。(ならっちょ)

はみだし
すてーじ

はみだすのって難しい…
⇒Easy!!!

(総・3 あくあふ)
(赤子の手をひねる編)